狐と少年の物語

名無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狐と少年の物語

【Ｎコード】
Ｎ６６９９Ｓ

【作者名】
名無し

【あらすじ】
少年は狐に恋をした。
そして狐も少年に恋をした。

そして今、物語が動き始めた。

内容がペラいので、イヤな方は回れ右を。
携帯電話推奨です。

感想を書く方へ。
批判は受け付けておりません。
キーワードにも書いてある通り、「見ない方が良い」です。

プロローグ

俺が起きたとき、そこは野原だった。
空には月が出ていて綺麗だ。
しかし、かなり問題がある。
「ここどこだよ……」
少年は呟くように言った。

約1時間ほど前

少年は高校の部活が終わり、いつものように神社に参拝してから帰るために、歩いていた。
「はぁ。あいつら、俺がモテるからって、4人連続で休み無しでかかるなよな～～。」
少年はため息混じりに呟きながら、神社の階段を一段一段ゆっくりと登ってから、鳥居をくぐり抜ける。
少年はいつも通りにこの寂れた山奥の神社に一人参拝と掃除のために来ている。

別の神社の神主に、ここに神社があると言ったのだが、見つからないと言って何もしなかった。

そのため、俺がこの神社に来ては参拝をしてから掃除をしている。

そして今日もいつも通りに掃除をしている時に不思議なことがおきた。

「寂しい……」
「！？」
少年しかいないはずの境内から、少年以外の声が聞こえてきた。
「悲しい……私は……」
少年はその声のする方向に急いで向かう。
少年が向かった先は、神様が奉られている社からだった。
「なんで、こんな所から……」
少年は不思議に思いながらも、社の中に入った。
そして、開けた先にはこのような所が広がっていた。

第一話『狐と少年の出会い』

少年はあの後携帯電話で時間を確認したら２０：３８と示していた。
少年が神社にいた時に確認（参拝後）した時はまだ１８：１９だったので、かなり時が経っているのはわかった。

「はぁ、親に電話したくてもアンテナ立ってないし…。それにさっきから、人も一人も見えないし……。」

そう、少年はまだ野原を歩いていた。
少年は携帯電話を取り出して、現在の時間を確認する。

「もう、（午後）１０時まわってるのか…」

少年はため息を吐き出した。
すると、草むらが急にガサガサと音がなった。

「なんだ！！？」

少年はびっくりして音が鳴った方を向くか何も出てこない。
少年はしばらくして、音が鳴ったところが気になってそちらにまるで吸い寄せられるように歩いていく。
するとそこには、ピンク髪の昔の日本の貴族が着るような服をした少女が、まるで死んだように眠っていた。

第二話『狐の悩みと少年の恋心』（前書き）

短いと思いの方がいると思いますが、それは作者の機械音痴なためです。
携帯からの投稿は短いですが、ＰＣからのは長くなると思います。

第二話『狐の悩みと少年の恋心』

―少女サイド―

少女は夢を見た。
今まで自分を拾って育ててくれた人との楽しい一時の夢を。
そしてそれが唐突に終わりになってしまい色々な武器を持った人に
ずっと追われていく。
逃げても逃げても追ってくる。

（嫌だ。死にたくない。私は何も悪いことなんてしてない。）

少女はそう思いながらひたすら逃げる。
ただひたすらがむしゃらに逃げる。

（これが悪い夢なら早く覚めて！）

少女がそう願うと・・・

―少女サイドエンド―

―少年サイド―

眠っていた少女が急に苦しそうに呻き出した。
俺は驚くと共に、その少女に近寄った。
よく見ると少女には、動物の耳と尻尾が生えていたが今は関係ない。

「おい大丈夫か！しっかりしろ！」

少年はそう叫ぶと少女の目がゆっくりと開いていく。

「ここ・・・は・・・。！！？あなたは誰ですか！？」

少女は少年の姿を確認すると急に飛び起きて少年から離れた。

「あぁ・・・俺は、黒牙（こくが）だ。斬龍黒牙（ざんりゅうこくが）。」

少年は少女にそう答える。

「では斬龍殿、あなたは私に如何様でここに・・・」

「如何様？？？いやって言うか、俺がここに運んだんじゃねえよ。」

少年ー斬龍黒牙は少女の言葉に疑問を持ちつつ答えた。

少女はその返答に驚きを隠せない様子だった。

「あとお前も名乗れよ。それにその耳と尻尾は？」

黒牙はそう言うと少女は驚き自分の耳と尻尾にふれた。その後何かを思い出したようで瞳から涙が流れた。

黒牙は少女に近づきそっと抱いた。

「何があったか知らないが・・・。嫌なことなら忘れろ。あと泣くなら胸貸してやるよ。」

黒牙は少女に諭すように囁いた。

少女は黒牙の言葉に感化されるようにその胸でおもいっきり泣いた。

黒牙はその少女を愛おしく思いながら頭を撫でてやった。

第二話『狐の悩みと少年の恋心』（後書き）

ＮＧシーン１

少年はそう叫ぶと少女はびっくりして、飛び起き・・・
ガン
「いって～～」
「痛いです・・・」

よくあるイベントだよね。

ＮＧシーン２

「あなたは誰ですか！？」
「あぁ・・・俺は、黒（くろ）・・・じゃなくて黒牙（こくが）だ。」

作者が本ｇｅｆｎｇｅｆｎ読み間違いのためＮＧ

ＮＧシーン３

少女は驚き自分の耳と尻尾にふれた。その後何かを思い出したようで瞳から涙が流れた。
黒牙は少女に近づきそっと抱いた。

「・・・・・・・・」
「台詞ですよ黒牙さん。」
「お」
「お？」

「お持ち帰り～～～～～～！！！！！」
「きゃ～～～～～～～」

黒牙の暴走により少女（玉藻）連れ去り事件が発生した。
このあとスタッフ一同により黒牙はフルボッコにあったとかあわなかったとかかえりうちにあったとかあわなかったとか・・・

第三話『狐は眠り少年は遣いに対峙する』

あのあと、少女は泣き疲れて眠ってしまい、黒牙は少女をそっと地面に横に寝かせて、自分の上着をかけてあげた。

「それにしても・・・」

黒牙はまわりを見ながらため息を吐いた。
なぜなら、そこにはおよそ２０匹ぐらいの狐の群が取り囲んでいたからだ。

「まったく、一応武術は出来るけど・・・。こんなに相手したら、絶対負けるな・・・」

黒牙は一人愚痴りながら、狐達の様子を見た。
しかし、黒牙が思っていたことは一切起きず、まるで何かを待っているように狐達は動かなかった。

黒牙は気を抜かずに狐達を警戒した。

「そんなに警戒しないで下さい。」

不意に、狐の一匹がそう言った。

「我々はそこにおらっしゃる、少女を迎に来ただけです。」

別の狐が続けて言う。

「そんな話を聞くと思うか？」

黒牙は狐達を一匹一匹睨みながら言った。

「わかりました。ではその方が目覚めた後にまた来ますので、その後私達ついて来て下さい。」

狐の一匹がまた言うと、狐達はどこかに去った。

黒牙は少しの間警戒していたが、何もない様子なので少女の隣に横になった。

「それにしても・・・狐が言葉を話すとは・・・」

黒牙は今更ながら驚き、少女を寂しく無いように手を繋いで眠った。

第四話『狐は少年に恋をする』（前書き）

二回目ですね。

さぁ、ようやくメインの名前が出せました。

第四話『狐は少年に恋をする』

―少女サイド―

私が起きるとなぜか黒牙さんが手を繋いで眠っていた。
それも幸せそうに・・・
私はこの耳と尻尾が急に生え、そして帝様まで御病気になられたため私自身、自分が人外に思えてしまった。
私自身が人じゃあなかったことに・・・。そして私が人じゃあなかったことが他人に知られることに恐怖した。
なのにこの目の前の彼は恐怖など無いかのように、私の手を握り、笑みを浮かべている。

「私自身、まだこの世界にいて良いのでしょうか？」

私は誰に尋ねるでもなく呟いた。

―少女サイドエンド―

黒牙は目を開けると、少女は黒牙に「おはようございます」と笑みを浮かべて言った。

「おはよう。昨日の夜、君が泣いていたのが嘘みたいだな。」

黒牙は笑みを返しながら言う。

「昨日のあれは少し怖い思いをしたために心が疲れていただけです。」

少女はスネながらそう言った。

「そうか・・・。じゃあ、もう一度聞くけど、君の名前は？」

黒牙は苦笑しながら尋ねる。

「私は玉藻前（たまものまえ）と申します。どうぞ気軽に玉藻とお呼び下さい。」

少女ー玉藻は、満面の笑みになって黒牙に言った。

第四話『狐は少年に恋をする』（後書き）

それにしても長く続きますね。過去編はまだ半分行くか行かないかぐらいです。

ちなみに作者は骨以外は、勢いで書いていきますので、文章がよく変になりますよ。

感想は随時お待ちしてます。

第五話『少年が気付いたこと』

玉藻との自己紹介も終え、黒牙は上着を着てポケットから携帯電話を取り出した。

「???黒牙さん。それは何ですか?」

玉藻は不思議そうに黒牙の手元の携帯電話を覗き込んだ。

「（今は7時４８分か）これは携帯電話だけど・・・知らないのか?」

黒牙は携帯電話で時間を確認したあと、不思議そうに玉藻の顔を見ると、玉藻は首を横に振った。

「そう言えば・・・黒牙さんのお召し物は不思議ですね。」

玉藻は黒牙の学生服を眺めながら言う。
ちなみに黒牙の服装は標準の学生服である。

「玉藻さん・・・西暦は知ってますか?」

黒牙はまさかと思いながら玉藻に尋ねると、玉藻はキョトンとして首を横に振った。

（西暦を知らない。学生服を知らない。そして携帯電話も同じでしかも繋がらない。）

黒牙は考え込むといくつかの結論に至った。

一つは過去にタイムスリップしてしまった。
二つ目に異世界にトリップしてしまった。
最後に実は夢。

この三つが有力だが・・・
黒牙はそんなことを考えているとグゥ～と音が鳴ってしまった。

「では、ご飯にしましょうか。」

玉藻は笑いながら少年に尋ねた。

第五話『少年が気付いたこと』（後書き）

眠い・・・・・・

過去編が終わったら、キャラ紹介します。

第六話『狐は少年に願うこと』（前書き）

今回は食事騒動。

誰でも苦手な食べ物はあるのだよ。

ちなみに作者＝主人公なため、味覚もだよ。

第六話『狐は少年に願うこと』

―玉藻サイド―

黒牙さんはどうも、野草が嫌いなようです。
私がせっかく見つけた野草をほとんど食べてくれません。
かなり悲しいので、なんとか出来ないか、考えているのですが・・・
どうすれば良いのでしょうか？・・・

―玉藻サイドエンド―

―黒牙サイド―

玉藻が作ってくれた料理（単なる食べられるように加工したもの）・・・を出してくれたが・・・

正直に言って、苦かった。
俺は苦いのと渋いのが大がつくほど苦手だ。
玉藻には可哀想なことをしたけど、人の味覚は好き嫌いがあるのだが・・・

玉藻の悲しそうな顔を見るたびに良心がかなり傷む。

―黒牙サイドエンド―

二人は少し気まずい空気の中、かれこれ二時間ほどいる。
互いに「ああでも無い、こうでも無い」と独り言を言いながら。

どちらも仲直りしたいらしく、色々考えるが実際にできず、ただただ時間が過ぎていく。

そして、そのまま昼食にまでもつれ込む。

「玉藻」

黒牙は玉藻を呼ぶと、玉藻はゆっくりと近づいてくる。

「あの、俺苦いのとか渋いのが嫌いなんだよ・・・・・・」

黒牙の言葉に玉藻は少しの間キョトンとしたが、ゆっくりと微笑み、

「はい、わかりました。」と言った。

第六話『狐は少年に願うこと』（後書き）

作者（黒牙）の料理は味付けがかなり濃いため、自分以外はかなり辛く感じるらしい。

ちなみに作者（黒牙）の好物は「レモン」です。

第七話『狐は遣いに会いて、少年は神に会う』（前書き）

ＰＶ累計６３５８
ユニーク累計１７０７

到達。

読者の皆様、私の作品「狐と少年の物語」を読んで下さってありがとうございます。
まだまだ続きますので皆様応援して下さい。

第七話『狐は遣いに会いて、少年は神に会う』

今は夕暮れ、別名「逢魔が時」と言われる時間、二人の前に多数の狐達が現れた。
狐達に黒牙は少し警戒しながら様子を見る。
しかし狐達はそんな黒牙を無視して玉藻の方に行き「お待ちしておりました」
とか、「お疲れ様でした」とか、「道中さぞ苦労なされたでしょう」とか、玉藻をいたわる言葉を言う。

「玉藻・・・知り合いなのか・・・？」

黒牙は話辛そうに玉藻に聞くと、玉藻は首を横に振る。

「黒牙さん。私はいったい・・・・・・」

玉藻は身を震わして言うと、狐の一匹が立ち上がった。

「あなた様は、天照大御神（あまてらすおおみかみ）様です。」

狐はそう答えた。
そのあと、その狐は玉藻の前世（神様）であった時の話をしていく。
その最中に玉藻はだんだん思い出していき、少し寂しそうな顔で「私は・・・なんと愚かだったのでしょう・・・」と呟いた。
狐達には聞こえなかったようだが、黒牙はなんとか聞き取れた。
黒牙は玉藻に近づく、玉藻は黒牙が目の前に来てようやく気づいたらしく、少し体がビクッとなった。

「黒牙さん・・・私・・・」

玉藻は泣きそうになりながら言う、黒牙は玉藻に頷いてやる。
すると、玉藻はついに涙が零れ落ち、後はただただ黒牙が胸で玉藻を隠してやりながら、玉藻が落ち着くまで、頭を撫でてやった。

第七話『狐は遣いに会いて、少年は神に会う』（後書き）

しんどい・・・
睡眠時間、約三時間・・・
皆様、作者に感・・・そ・・・う・・・を・・・

玉藻「黒牙さ～ん。そろそろ時間で・・・す・・・よ・・・。黒牙さん！どうしたんでしか！しっかりして下さい！黒牙さん！黒牙さん！黒牙さ～～～～ん！」
作者「ｚｚＺＺＺ」
玉藻「なんですか、ただ眠っているだけですか・・・良かった。」

第八話『夢は終わりて、狐は眠り、少年は明日（みらい）に帰（き）す　（前編）

過去編もついに大詰め、玉藻と狐達そして黒牙の身に危機が迫る。

その前編開始です。

第八話『夢は終わりて、狐は眠り、少年は明日（みらい）に帰（き）す（前編）

玉藻が泣き止み、狐達と黒牙に玉藻はこれからのことについて話始めた。

「やはり、ここは我々の森に！」

狐の一人（一匹）が、まるで自分こそが正しいと言う感じで提案する。

「却下。理由は二つ。まず俺は方向音痴なため森にはいけない。あと玉藻と合ったのは偶然かも知れないけど、二人で生きてみたいと思うから。
だから・・・
俺は玉藻には俺の世界（いえ）に来て欲しい。」

「黒牙さん・・・」

黒牙の言葉に玉藻は少し頬を赤くして、うつむく。

「して、それはいずこに？」

狐の一匹は尋ねる。
しかし黒牙は応えない・・・。
いや、応えないられなかった。
黒牙もこの場所がどこかまずわからない。
もしかしたら、本当に異世界かも知れないし、実はどこかの国かも知れない。唯一わかっているのが、帝と言うのが一番権力を持っていることと、和服であることから、日本に近い世界か日本の過去で

あることはわかっている。
だが黒牙自身、望んでここに来たのではなく、知らない間にここに来たのだ。
黒牙は苦虫を噛み潰した表情になる。
「何も応えないようなので、駄目ですね。」
狐はそう言った時、風切り音が鳴った。

第八話『夢は終わりて、狐は眠り、少年は明日（みらい）に帰（き）す　（前編）

急な風切り音が響く！

「玉藻！」

少年は叫ぶ！

「黒牙さん！」

狐も叫ぶ！

「死にやがれ！化け物共！」

「けして逃がすな！」

兵達は弓を放ち敵を・・・

少年と狐を殺そうとする。

「黒牙さん・・・。できるのならもう一度、あなたに・・・」

狐の独白はいったい何を！

てな訳で読者の皆様、こんにちは。

作者の「斬龍黒牙」です。

えっ？作者名が違う？
最初のキーワードをよく見て下さいよ。
「作者が主人公」ってあったはずですよ？
まぁ、それはさて置き。
ついに過去編にひと区切りですね。
一応予定として、この後、「現在編」「聖杯戦争編」「未来端末編」
みたいな感じになっています。
あくまで予定ですので、あしからず。

第九話『夢は終わりて、狐は眠り、少年は明日（みらい）に帰（き）す　（後編）

ラスト完成。

クオリティーがかなり最低。
だけど文字数だけ過去最大。

さぁ、黒牙と玉藻の未来は如何に！！！？？？

第九話『夢は終わりて、狐は眠り、少年は明日（みらい）に帰（き）す（後編）

―???サイド―

帝に呪いをかけた妖狐玉藻の討伐。
それが我々の使命である。
帝のために我等は剣となり、盾にもなる覚悟はあった。
しかしあの陰陽師曰わくは、「敵はかなり強大な妖（あやかし）」らしい。
なぜらしいかと言うと、今前方にいる狐耳をしている少女がそうらしいからだ。

「ふん、あの陰陽師が、どこからどうみて、あれが巨大なんだ」

俺は鼻で笑い弓兵達に合図を送る。

「近くにいる小僧には悪いが一緒に死ね」

俺はそう言うと同時に「放て」の合図を送った。

―???サイドエンド―

―黒牙サイド―

狐が俺の案を否定され駄目だしを食らっている最中に急に悪寒が走った。
とっさに玉藻を倒し、草むらに隠れた瞬間、一本の矢が風切り音を鳴らしながら玉藻の頭があった所を通り過ぎた。
それを先頭に多数の矢が雨霰となって降り注ぐ。

さっきまで、会議していた場所には狐達の断末魔が聞こえてきた。

「玉藻！大丈夫か？」

俺はそう尋ねると同時に草むらになぜかあった、腕ぐらいの太さがある棒を持ち、それをバレないように投げた。

―黒牙サイドエンド―

黒牙は草むらから出ない程度に投げた木の棒は、まるでそこを誰かが走っているかのように移動する。
それと同時にどこからか声が響いた。

「やつらは、左後方に行ったぞ！」

「黒牙さん」

玉藻は恐いのか黒牙にしがみつき離そうとしない。
黒牙はその温もりを感じながら、さっき聞こえてきた声の方を見る。

「（声の主が上の奴だよな。）玉藻、ここにいてくれ！」

黒牙は玉藻に言う。

「嫌です！私を独りにしないで下さい！」

玉藻は泣きながらそう叫んだ。
しかし叫んだのだから、せっかく止みかけていた弓矢の雨霰がまた忙しなく降り注ぐ。

「玉藻、聞いてくれ。俺はお前に生きていて欲しい。それに玉藻は神様なんだろう？なら俺が護ってやるから。な？」

黒牙は優しく言うが、玉藻は虚ろな眼で「置いていかないで・・・」と訴える。

「大丈夫だから、ちょっとあの人達に話をしてくるだけだから。」

黒牙はそう言うと、玉藻を残し、一人敵陣にバレないように動いて行った。

弓矢が止み弓矢のほとんどは草に隠れているが、かなりの血が流れ出ているのがわかった。

指揮官らしき男は「やはり楽な仕事じゃないか。」と呟き兵隊を引き連れ撤退しようとした時だった。

「動くな！」

一人の少年・・・黒牙が指揮官の後ろから、武器を突きつけていた。

「貴様・・・いったい、どうやって！」

指揮官の男は叫ぶが黒牙は何も言わずに男の持っている脇差しを抜くと首に据えた。

「お前達は今日は良いな。」

黒牙はそう言うと、男の首に据えた脇差しで喉元を割斬った。

男を黒牙は殺すと、兵士達に僅かながら同様が及んだ。
しかし、それも本当に僅かな時間。
約一分いやもっと短いかも知れない。
そんな僅かな時間で兵士達は黒牙に向かって獲物を持って挑んだ。

―玉藻サイド―

黒牙さんが敵の頭を殺すのが見えた。
これで兵士達は帰って行くだろう。
私は内心安心した。
だけどそれは間違いだった。
集められた兵士達が勇敢過ぎた。
自分達の上役が死んだのだから、散り散りとなり逃げ帰って行くことを望んでいたのに・・・
黒牙さんは兵士達の動揺が無いに等しい段階で、一斉に襲いかかられるのが見えた。

「黒牙さん・・・黒牙さん！」

私は酷い悪夢を見ているのでしょうか？
私は急いで黒牙さんの所に向かった。
だけど、それは遅かった。

―玉藻サイドエンド―

兵士達は急に現れた少女・・・玉藻を見て驚いたが、玉藻から生えた耳に尻尾を見て納得したようだ。

「この野郎！死にやがれ！化け物共！」

一人の兵士が突っ込んだが、一瞬にして燃え上がり、炭となった。
他の兵士達も挑んだが細斬りになったりした。
玉藻は玉藻で今は血まみれの黒牙を抱いて、虚ろな眼で泣いた。
あまりにも悲しくて、ただただ悲しくて。
玉藻の中で黒牙は、たった1日だけしかいなかったが、とても大切な人に成っていた。
だから玉藻はただただ虚ろに死んだ黒牙を抱きしめながら空を見て泣いた。

辺りは血まみれのなっていた。
「黒牙さん・・・できるならもう一度あなたに・・・」
玉藻は黒牙の亡骸をしっかり抱えながら、襲い来る矢の嵐から逃げずにそのまま刺さっていく・・・

―黒牙サイド―

俺は闇の中で後悔した。
俺は守りたい人も護れずに死んだ・・・
ただただ絶望した。
すると、どこからか白い光が現れた。
ただただ暖かいその光を見つめていると、その中に手があるのが見えた。

「玉藻？」

俺は尋ねるが手の主は何も応えずに俺の手を掴む・・・

―黒牙サイドエンド―

第九話『夢は終わりて、狐は眠り、少年は明日（みらい）に帰（き）す　（後編）

アンケート。

この後「現在編」に突入何ですが、少し先の「聖杯戦争編」でのアンケートです。

まず、聖杯戦争は次の５つの内どれが良いですか？

・普通にフェイト・ステイナイトのような感じで。

・エクストラ形式のトーナメントで。

・バトロワ方式の参加人数はエクストラなみ。

・作者、君に任せる。

・その他（この場合は具体的にどんなのか教えて下さい。）

因みに期限は現在編終了までです。

キャラ紹介

かなり遅いですが、キャラ紹介です。

名前　斬龍黒牙
性別　男
外見　黒髪黒目で黒い学生服ですが何か？
その他　作者のアバターにして作者自身。
因みにプロローグのモテる発言を聞いてリア充死ね！
みたい思ったかた。残念、黒牙のモテる発言の真相は「現在編」を
書きますので、御期待を！！！

名前　玉藻の前
性別　女
外見　ピンクの髪に琥珀色の目で、服装は・・・
Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡの玉藻過去話に出てきた姿。
つまり青を基調とした、貴族の服装。
その他　玉藻の過去に行ったので少し暗めです。
一応「現在編」を除いた、この物語ヒロインの少女。
正体は「天照大御神」であり「白面金毛九尾」である。

第十話『目覚め』

黒牙は目を開けると、そこは神社の社の中だった。

「あれは・・・夢だったのか・・・？」

黒牙は一人呟くと慌てて、携帯電話を出して時間を確認した。
２：５２と携帯電話の画面に映っていた。
黒牙は携帯電話を閉じてゆっくりと息を吐いた。

「あれが夢だったのか・・・それとも今が夢なのか・・・」

黒牙は呟いた後、社の中一通り見てから帰ろうと思い、立ち上がった。
すると衣服に付いていたのか、金色の繊維が所々に服についていた。

「！！？」

黒牙は驚いた。
その後苦虫を噛み潰したような顔になった。

「なんで・・・護ってやるって言ったのに・・・」

黒牙はそう言うと、社の奥が光った気がした。
黒牙は何だろうと思い、奥に入っていく。
そこには、一振りの黒い剣と鏡が置いてあった。

第十一話『神は、かくして少年に語る』

黒牙は鏡に恐る恐る近づいて行く。
そこに映っていたのは自分では無く。
服装は違えど、玉藻がそこにいた。

「あなたが黒牙ですか？」

玉藻・・・いや、玉藻に似ている少女が黒牙に威圧的に尋ねた。

「そうですが・・・誰・・・ですか？」

黒牙はゆっくり尋ねた。
玉藻に似ている少女は、黒牙の答えに気を良くしたのか、微笑みを浮かべて応えた。

「私は天照（アマテラス）。あなたの会った玉藻の大元の人格です。」

黒牙は目を点にして先程の意味を理解したのだが、納得出来ないようすで、口をパクパクしていた。

「ふふふ。面白い人ですね。」

天照は微笑みを浮かべる。
しかし一瞬にして、キツい表情になった。

「なぜ私があなたに厳しい表情になるか分かりますか？」

天照は尋ねる。

黒牙は少し悲しそうな表情になって「分かっています。」と応える。

「俺が・・・玉藻を護ってやると言ったのに、護れなかったことです。」

黒牙はそう応えると天照はさらに厳しい表情となった。

「たしかにそれもあります。しかし、それよりも大事です。」

天照は厳しい表情のまま涙を零しながら言う。

「あなたは、彼女と共にいると言ったのに、なぜ一人であのような無茶をしたのですか？独り残された彼女がどれだけ寂しいかわかりますか？」

天照は黒牙に尋ねると黒牙はハッとした表情になる。

その後黒牙は後悔し悔やみ悔やみきれず、ただただ涙を流した。

その表情に天照少し表情を緩めて黒牙に尋ねた。

「あなたは、彼女が大切でしたか？」

「当たり前だ！」

黒牙は相手が神なのもお構い無しに八つ当たり気味に天照に叫んだ。

「なら、良いことを教えましょう。どこかで近々聖杯戦争と言うのがあるみたいです。それに参加して最後まで生き残れば、彼女を蘇らせることが出来ます。」

天照の言葉に黒牙は天照を見る。

「それは本当ですか？」

黒牙の問いに天照は頷いた。

「しかし、これは生き残りをかけた殺し合いです。あなたには、この社にある御神刀「殺生刀」を与えます。それとこの鏡、「水天日光天照八野静石」も貸し与えましょう」

そう言うと急に黒い剣が浮かび上がり、黒牙の前に移動した。

「あなたが今後必要となる力です。」

天照はそう言うと黒牙は剣を手にした。

しかし剣を持った瞬間、黒牙の悲鳴があがった。

第十二話『狐は少年を思いて眠る』

―玉藻サイド―

私は黒牙さん、あなたさえ居てくれれば良かった。
だけどあなたは死んでしまった・・・
黒牙さんが死んでしまったのは私のせいだ。
私があの時、彼を止めていたら・・・
あの時、彼と遣いの狐達と共にすぐに移動していれば・・・
あの時、彼と話をしなければ・・・
あの時・・・・・・

―玉藻サイドエンド―

黒牙はいつの間にか、野原に来ていた。
それも玉藻と合った野原にとても似ていた。

「クッ！」

黒牙は顔をしかめながら、頭をおさえた。

（アアァァァアアアァァァァ）

黒牙の頭の中に直接響く叫び声。

「（何なんだ・・・この声・・・）」

黒牙は頭をおさえながら、疑問に思った。

「この声・・・玉・・・藻・・・？玉藻なのか！！！？」

黒牙はその場で叫ぶ。
しかし玉藻は現れない。
だが黒牙は確信していた。
玉藻がここにいることが。

「玉藻・・・」

黒牙は頭に響く叫び声に頭をおさえながら、玉藻を探し歩いた。

―玉藻サイド―

もし黒牙さんに会えるなら会いたい。
だけど、私は黒牙さんに会う資格すら無い。

「玉藻！！！！？」

！！！！？
黒牙さんの声がした。
私は黒牙さん会う資格すらないのに・・・
神様・・・
どうか、黒牙さんに幸福な人生を与えて下さい・・・

―玉藻サイドエンド―

玉藻の叫び声が頭に強く響いてくるが、黒牙は耐えていた。

この先に玉藻が待っていることを信じて、黒牙は玉藻の叫び声が大きくなっていく方向に歩いて行く。

（アアァァァ寂アアァァしいアアァァア）
（アアァァァ悲ァアアァァしいアアァァ）
（アアァァァ黒牙ァアアアァァアアァァ）

叫び声の中にポツリポツリと声が響いてきた。

「（玉藻・・・）」

黒牙は心の中で玉藻の名をよんだ。
それと共に空間にヒビが入り割れた。
その中には玉藻が無表情ながら叫び泣いていた。
黒牙はすぐさま、玉藻を抱きしめる。

「ゴメンな玉藻。」

黒牙はそう言った後に・・・

第十三話『殺生刀　それは彼女の心』

「目覚めましたか。」

いつの間にか横になっていた黒牙が目覚めると同時に声が聞こえた。

「天照・・・様・・・」

黒牙は苦しそうに、鏡に映っている天照をみた。

「良いのです。剣の妖気も収まりましたから。彼女の心に会って来たのでしょう？」

天照は嬉しそうに黒牙に尋ねる。

黒牙は目を瞑りながら「えぇ」と呟いた。

「私の・・・玉藻の願いも聞いてますか？」

「はい。俺の幸せを玉藻は願っていました。」

天照の問い掛けに黒牙はすぐさま応えた。

そして黒牙は気怠い体で立ち上がると、自分の持っている剣に違和感を覚えた。

黒牙は気になって剣を見ると、剣は黒色からいつの間にか瑠璃色に変わっていた。

そして剣自体、確かに握っているのだが、全然重くないのだ。

「さて、早く帰って差し上げないとあなたの御両親が心配します。」

「そう言えば・・・」

黒牙はおもむろに携帯電話を取り出し時間を確認した。
２０：２７・・・それも自分が彼女と初めて会って日の・・・

「これはいったい・・・」

「あなたが飛んだ時間を戻しただけですよ。」

黒牙の疑問に天照は応えた。

「玉藻の心に触れたのですから、あなたの持つ剣は、自分を媒体にしていつでも出せます。イメージで言えば、自分の中に剣が入っていく様子で剣は消えます、剣を手に持っているイメージで剣が現れます。
私は少し疲れたので、後はお願いしますね。」

天照は黒牙にそう言うと、鏡を浮かび上がらせ、黒牙の鞄の中に入ってしまった。
黒牙は天照から聞いた通りに剣を納めると鞄を持って家に帰宅した。

閑話『天照大御神の憂鬱』

迂闊でした。
私の神社に彼が現れ、あんなことになるなんて・・・
今はもう朽ちて今にも壊れそうな私を奉る神社の一つ。
この神社に参拝する方はほとんどいませんので、他の私を奉る神社を回ってから毎回来ていました。
その日もまた同じように他の神社を回り、いつも来ている少年の様子を見て帰るつもりでした。

「寂しい・・・」

私の・・・いえ、私の別れた御霊の一人、玉藻の前の声が聞こました。

少年もどうやら聞こえたらしく、走って本殿に向かっております。
私も急いで向かいますが、他の神社で願いを叶えたりしていたためか、力が上手く働かず、少年が先に本殿に入ってしまった。
すると中から白い光(やみ)が漏れたかと思うと、少年は消えていました。

「私(たまも)、これが私(たまも)の願いなの・・・」

今は亡き自分に尋ねても、その応えは帰ってきません。
仕方無く、いつものあの少年がいてそうな場所、時間を術で探し見つけた時には、もう死んだ後だった。

私は「まぁ、彼の運命ですね。」と呟いてその場から離れようとした時、私以外の誰かが、私の力を使うのを感じた。

「過去の・・・
私の別れた御霊である玉藻が力を使って、少年を蘇らせて、もとのこの時間に帰したようですね・・・」

私は一人溜め息を尽きながら呟いた。
それと同時に私(たまも)の記憶に、何があったか教えてくれました。
それは・・・

私を愛してくれる、未来の旦那様。
私を護って下さる、無謀で勇敢な御武家様。
そして・・・
私が狂わせてしまった、とても大切で大好きな御方。

・・・・・・

私(たまも)の思いが流れ込み、私は彼に感謝をしながら少し恨みを持った。
しかし人である以上、この少年に過度の期待をしては哀れと思い、
私はその少年が起きてくるのを待った。

第十四話『家族』（前書き）

すみません。
遅くなりました。

相変わらず、クオリティーは低いですが・・・
楽しんで頂ければ幸いです。

第十四話『家族』

黒牙が家に帰った時には、もう２１：００を過ぎていた。

「黒牙！今まで何をしていたんだ。心配したんだぞ！」

玄関を入ってすぐの所に義父（おとうさん）が仁王立ちしていた。

その後ろには義母（おかあさん）が何かの演技かのように「エ～ン」と口で言いながら泣いている。

「ごめんなさい。ちょっと、神社で勉強をしてたらいつの間にか寝ていて・・・」

黒牙は義父にそう言い訳をすると、「そうか」と一言言って義母を連れて、居間に向かう。

家族内のルールで「夕食は家族全員で食べること」。

そのため義父も義母も今の今まで夕食も食べずに待っていてくれたのだ。

「・・・黒牙さん。あの者達は貴様（あなた）の親ですか？ずいぶん、雰囲気とかが違うのですが・・・」

天照が鏡の中から尋ねる。

「いや。違いますよ、天照様。俺は・・・」

黒牙は言い辛そうに言おうとするが天照は「別に構いませんよ」と言った。

そのあと天照は何も言わず、黒牙も家族とかなり遅い夕食を食べに居間に歩いた。

第十四話『家族』（後書き）

余談ですが・・・

実は黒牙は養子だった。

と言うか捨て子です。

現在の両親が偶然かなり傷だらけの幼児を発見のちに通報。紆余曲折があり親になりました。

ちなみに「斬龍黒牙」の名前はその時幼児が言った名前で、そのまま名前に。

この話は未来末端にでも語りましょうか。

閑話『祝・祭はほどほどに』

玉藻、見てくれ！

【ＰＶ　１６０５３】
【ユニーク　３５９５】

玉藻「すごいですね！
黒牙さん、ここは皆さんに一言。」

あぁ。
皆様、これほど読んで頂いてありがとうございます。

天照「黒牙さん。貴方はこれからこの物語をどの様にしていくのでしょうか。」

天照大御神様！

天照「そう堅くならずに。」

あっ、はい。
一応予定としてはこのまま、完結にまでもっていくつもりです。

天照「まだ堅いようですが、良いでしょう」

玉藻「まぁまぁ。黒牙さんの思いは分かりました。
なら自分の道は自分にしか歩めないのですから。」

・・・・・・

天照「まぁ、私達を生み出したのですから、当然でしょう」

分かってます。

私の名前に賭けて、必ず玉藻に幸せな未来を掴ませてあげます。

玉藻「／／／／／／」

天照「おやおや。ある意味凄い告白ですね。

私（玉藻）もまだまだ純情ですし♪」

アーチャー「・・・・・・。なんなんだこの空気は・・・」

セイバー「知らぬ。何とかならんのか？赤き弓兵よ。」

アーチャー「無理だな。」

セイバー「・・・即答じゃな・・・」

アーチャー「あの中に突入するよりは、様子を見ながら「アレを見てみろ！アーチャー！」どうした？」

？？？？「全く。祭りだと言うから来てみたものを。」

玉藻「黒牙さん誰ですか？？？」

あぁ。彼の名前は■■■■■■■だよ。

???「今の拙者の名前は「■■■■■■■」では無くただのセイバーだ。以後聖杯戦争まで会わぬがよろしく頼む。」

わかってる。

てな訳で、まだまだ現在編が続きますが、皆様。

応援される方々は引き続き応援の方をよろしくお願いします。

ちなみに内容が薄い等の文句は、キーワードにもありましたが「ペラい」ので聞きません。

と言いますか・・・

基本が私は詩人なんで、長い文より短い文が得意なんで。

ちなみに読まれる方は詩（詩の中には物語の一部を抜き出した様な物もあります。）だと思い読んで貰ったら納得しますかね？

第十五話『夢』

―夢サイド―

黒牙は戸惑っていた。
聖杯戦争に勝ち残らなければ、絶対に会えないと思っていた少女・・・玉藻に会っていたからだ。

「こんばんは、黒牙さん。
お会いできて私はとても嬉しいです。」

玉藻は頬を赤くしながら、黒牙に微笑む。
黒牙は玉藻の顔を見た途端、顔を真っ赤にしてすぐにそっぽを向いた。

「黒牙さん。あの時「言うな！」！！！」

玉藻の言葉に割って黒牙は叫んだ。
玉藻は少し驚いたが、嬉しそうに黒牙に近付いた。

「黒牙さん。私は・・・玉藻は、あなたに出逢えて本当に嬉しく思っております。」

玉藻は黒牙に抱きつき、涙混じりに言った。
玉藻にしても、黒牙が死んでからずっと泣いていたため、黒牙が生きてこの世界に居てたことに喜び、そしてこの再会に自分の大元である天照大神に感謝をした。
黒牙もこの再会を嬉しく思っているのだが、玉藻を正気に戻すためにしたこととはいえ、玉藻にしたことがかなり恥ずかしいため、顔

を合わせ辛いのだ。

―夢サイドエンド―

４：００

まだ太陽も昇らない時間帯に、天照は鏡の中から少年・・・黒牙を見て溜め息を吐いた。

「斬龍・・・まさかと思っていましたが、やはりあなたは・・・」

天照は黒牙に一瞬、厳しい顔をしたがすぐにまた優しい顔に戻った。

「（この者はあの者とは違う。愛しき人を見つけ、それを取り戻すために今は命掛けの戦いに行くかも知れないのですから・・・）」

天照はそう思い、黒牙の夢の中に現れているだろう玉藻に微笑みながらその様子を見ていた。

それから二時間後、黒牙は起きて寝ぼけ眼で朝食を食べるために居間に向かった。

第十六話『寝る子は育つが、眠り過ぎは死を生む』

「黒牙さん・・・起きてますか？」

天照は黒牙に尋ねる。

朝食を食べた後もずっと寝ぼけているらしく、現在神社に来て寝ていた。

「（黒牙さん・・・あなたはなぜ寝ぼけながらココに来るのですか・・・）」

天照は溜め息を吐いた。

「（まぁ、ココならギリギリの時間まで大丈夫でしょうが・・・）

黒牙さん。学校に早く行かないと遅刻ですよ。」

天照は黒牙に呆れながら声をかけるが、黒牙はまだ眠っている。

「玉藻」

天照がそう言った瞬間、黒牙の体がビクッと動いた。

天照は昨日の晩に気づいたのだが、黒牙が寝ている時「玉藻」と「弓矢」の言葉に反応して体がビクッと動くのである。

キーンコーンカーンコーン

キーンコーンカーンコーン

キーンコーンカーンコーン

学校から鐘の音が響くと黒牙の目が開き、少しのびをした。

「おはようございます。天照様。」

寝ぼけ眼で黒牙は天照に挨拶をした。

「黒牙さん。早く学校に行かないと・・・」

天照は黒牙を急かすと、黒牙は「うん。行ってきまーす」と言って、天照が映る鏡を置いて走って学校に向かう。

「ちょっと、黒牙さん！・・・行ってしまいました・・・」

天照は少し溜め息を吐いてから、自分の持つ力をあまり使わないようにして、黒牙の様子を鏡に写していた。

黒牙はあの後ギリギリでホームルームに出席（寝ていたけど）した後、一時間目の用意をしていた。

第十七話『学校』

黒牙は一応「真面目」だ。
天照は黒牙が真面目に授業を受けているのを見て、少し感心をしたが・・・

「斬龍君。この問題を答えて下さい。」

かなり優しそうな教師が黒牙を指名したのだが。

「・・・・・・」

なぜか黒牙は返事をしない、何事かと思い黒牙の様子をよく見て、天照は納得してしまった。

「寝てますね。」

天照は溜め息を吐きながら、しばらく様子を見ると、黒牙自身別の意味ですごいことをしているのに気が付いた。

「先生。斬龍君は、またトランスしてるようなので、放置しましょう。」

クラスの委員長らしき少年がそう言うと、教師は溜め息を吐いて、授業を再開するために板書を書いていくと、黒牙は寝ながらその後にそって書いていく。
それを鏡で見た天照は、もう驚き過ぎて開いた口が塞がらないようになっていた。
〔後に黒牙の説明によると、意識を半分起こしながら、夢を見ると

正夢を体験しながら、体も動くようになったらしい。
ちなみに内容は、なぜか国語なのに理科になったりすることは多々あるらしい。」

他の授業も大体同じ様な感じだった。（体育の時はチャンと受けていた。）

そして放課後になると、天照は急いで黒牙の学校に行くために、鏡を浮かして飛んでいった。
ちなみに黒牙は眠りが深いためか、放課後になっても寝ている。

第十八話『放課後の地獄』（前書き）

相変わらずの、ペラいしクオリティーが低いけど・・・

見ていただければ、幸いです。

第十八話『放課後の地獄』

「黒牙〜〜！！！」

そんな声が放課後の学校に鳴り響く。
剣道部主将「河端彩葉（かわはた いろは）」は黒牙の教室に入ると同時に、寝ている黒牙の頭を思いっきり殴った。
黒牙は「いっっって〜〜」と頭を押さえる。

「黒牙！貴様、今日と言う日はもう勘弁ならん！」

そう言うと、彩葉は拳で黒牙を殴りまくる。
しかし黒牙は自分の鞄ですべて防いでいる。

「キャプテン、今回は勘弁して下さい。」

黒牙は彩葉に向かって叫ぶが、彩葉は「貴様の戯れ言なんかに聞く耳はもたん！」

と叫ぶと同時にラッシュの勢いが増していく。
黒牙はとっさに鞄を投げて逃げようとするが、それを見抜いた彩葉は鞄を避けると同時に黒牙を叩きのめした。

「黒牙よ。最期に言い残すことは。」

彩葉は黒牙に尋ねたが、黒牙は喋る気力も無いらしく。
倒れたまま一切動かない。

彩葉は黒牙の襟首を掴んだまま、ずるずると剣道部の道場に向かった。

第十八話『放課後の地獄』（後書き）

後少しで現代編終了。
後は聖杯戦争編に成ってますが・・・

アンケートの回答が、作者に任せるに一票しかありませんが、他に案はありますか？

第十九話『神と部長　少年のために一同合掌を』（前書き）

ようやく完成・・・・・・

仕事も忙しいので毎日更新したいのですが、ちょっと難しいですね……

文章もいつも通りですし……。

第十九話『神と部長　少年のために一同合掌を』

黒牙が起きたらそこには満月があった。

「あれ、黒牙さん？どうしたのですか、こんな時間帯に」

黒牙の上から声が聞こえた。

そこには玉藻がキョトンとした表情で尋ねていた。

「玉藻！

と言うことは・・・夢の中なんだよな」

「えぇ。そうですけど・・・」

黒牙の問いに玉藻も不思議そうに答えた。

その答えに黒牙は自分がなぜここにいるのかを考え始めた。

それは彩葉によって部活に連行される時に起きた。

相変わらず襟を掴んだまま引っ張る彩葉の前に、一人の少女（らしい人影）が立ちはだかった。

「すみませんが、そちらの方を渡して貰えないでしょうか？」

「残念ながら、これからこやつとデート（制裁）のために無理だ」

その言葉を聞いた少女・・・天照は黒牙をキッと睨んだ。

しかも声無き声で「どう言うことだ」と聞いているみたいだ。

「（彼女は部活の部長で風紀員なんですよ…そのせいで俺が何かした時にはデートと言う名の制裁でいたぶるんです）」

黒牙は天照に小声でそう言うと、天照はホッとした表情になる。

「それはそうと、黒牙よ。この人は誰だ？学校の関係者には見えないのだが・・・」

彼葉は天照を睨みながら黒牙に尋ねた。

「えっと・・・」

「恋人です。」

黒牙が言い辛そうにすると、天照はそう断言した。

「なんだと！！！」

近くの教室から叫びながら、何人かの男子生徒が現れた。

「斬龍！貴様我等が彩葉様だけでなく、そんな可愛い娘まで・・・ユルサン・・・」

一人がそう言うと他の男子達（別名「彩葉親衛隊」のみなさん）も「ユルサン」と言うと同時に黒牙に襲いかかって行った。

「それから、あいつらにリンチになりかけたのを彩葉が助けた後で

彩葉による地獄の稽古をさせられたんだっけ・・・」

黒牙は遠くを見るような目で玉藻を見ていた。

第二十話『少年の実力』

黒牙が夢から覚めると、そこは道場だった。

「この程度で音をあげるとは、精進が足りない！」

いきなり黒牙の近くで彩葉が叫んだ。

「キャプテン。この稽古で音をあげない人はいないと思います。」

黒牙は冷静に返す。

ちなみに稽古内容は初めに打ち込み（黒牙のみ全員相手にして）、次に試合稽古（黒牙一人対全員）、最後に切り返し（黒牙一人道場の端から端まで）をした後は自稽古となっている。

なお、この稽古内容は彩葉の怒りに触れた者、風紀を乱した者に対して行われる。

「それはそうと・・・」

彩葉は黒牙を少し睨みながら、言い辛そうに言葉を紡いだ。

「打つ時に、かなり力が入りすぎている。

前まではそんなことは無かったのに・・・

何か悩みでもあるのか？」

彩葉は黒牙に尋ねるが黒牙は「何も」と言った。

そのとき天照が申し訳なさそうに黒牙を見ているのを見たのはいないだろう。

「そうか・・・。
なら、少し本気でやり合うか。」
彩葉の言葉に黒牙はあからさまに嫌そうな顔をした。
「手を毎回抜いてやっている奴にはキツいお灸をしないといけないからな。」
そう言うと、いきなり竹刀で黒牙を打ちにかかる。
しかし黒牙は竹刀で防いでいた。
「キャプテン。いきなり攻撃しないで下さいよ。」
「お前なら見えてる攻撃なら全部簡単に防げるだろうが。」
黒牙の言葉に彩葉がそう返すと連続で仕掛ける。
小手から面に、さらには突きから逆胴、本当の刀なら有り得ない角度から様々な技を繰り出すが、黒牙はすべて受けて流し、時には技の初動から動きを封じにかかったりとすべての技を受けきる。
「相変わらず、嫌な奴だな・・・」
彩葉はさらに虚実を混ぜながら攻撃するが、黒牙もそれを読んだのか、技の始まりから防ぎにかかる。
「いきなり、無抵抗な相手に攻撃する人よりはマシかと…」
そんな風に黒牙と彩葉は売り言葉に買い言葉をしながら打ち合った。

第二十話『少年の実力』（後書き）

この後、先生が来て黒牙と彩葉はかなり怒られました。

第二十一話『少年の思い』

部活も終わり、夕暮れ時にはまだ少し早い時間帯。
黒牙はまたいつものように神社に向かう。
いつもは一人なのだが、傍らには天照が一緒に歩いていた。

「黒牙さん。」

「なんですか？」

「一つ確認ですが・・・
あなたはもし玉藻を現在に蘇らすのに、あなたの命が必要と言われたらどうしますか。」

天照は立ち止まり、黒牙に尋ねた。

「対価・・・ですか。
自分の命で彼女の幸せが付くなら安いものですね。」

黒牙は少し寂しげに応えた。

「それは私（玉藻）にとって、本当に幸せだと思っているのですか？」

天照は真剣な表情で黒牙を睨む。
数十秒間、黒牙は天照の表情が変わらないから観念したのか、ため息を吐きながら応えた。

「正直に言えば、玉藻と一緒にここで生きたい。もしここがダメで

も、別の世界で一緒に生きられるならそれでいいと思ってるよ。
だけど・・・本当に玉藻が俺と一緒にいることが幸せなのかわからないんです。
俺はあのとき、彼女に「護ってやる」っと言っておきながら、結局守れずに・・・」

黒牙の声が段々泣き声混じりになってきた時、天照はそっと抱き締めた。

「すみません……
少しだけ……借ります。」

黒牙はそれだけ言うと、天照の胸のなかで泣いた。
天照は黒牙を優しく撫でてあげながら、この少年ともう一人の自分との未来を思い描いていた。

第二十二話『少年は異界の扉に手を叩く』

あれから数日たったある日。

「黒牙さん、聖杯戦争の開催地がわかりました。」

天照が急にそう言って黒牙しか居なかった部屋に現れた。

「天照様、急に部屋に現れないで下さい。
あと場所はどこですか？」

黒牙はため息混じりに天照に言うと天照に場所を尋ねる。
すると、天照はコンピューターを指して「この中です。」と言った。

「どういうことですか？」

「簡単に言いますと、電子世界に作られた仮想現実の世界が舞台らしいです。
その世界に魂だけを送り込み、そして戦い合うみたいです。」

黒牙の問いに天照はすぐ応えると、黒牙は難しい顔をした。

「つまりは、一度死なないといけないのですか？」

「いえ。魔術師しか参加できないのですから、彼等は自分自身を電子として送ることもできます。」

「だけど自分は・・・」

天照の言葉に黒牙は暗い表情になる。
「魔術師しか参加できないのなら、魔術師かどうか怪しい黒牙は参加出来ないのでわ・・・」
黒牙の頭の中でそう考えていると、天照が黒牙の頭を叩いた。
「そんなに悩まないで下さい。
あなたが魔術師ではなくても私がいます。」
天照はそう言うとコンピューターに触れてから何かを言うと、起動していなかったコンピューターがいきなり起動を始めとあるサイトに繋がった。
「これは・・・」
「そのサイトに自分の名前・・・
つまりはプレイヤーの名前と簡単な質問、あとは制約事項のサインして決定すると自動で行けるようになります。」
天照がそう言うと、鏡を黒牙に渡した。
「私（玉藻）にこれを渡して下さい。」
「わかりました。それじゃあ行きますね。」
黒牙はコンピューターに質問などを記入しながら、鏡を受け取り天照に微笑んだ。
「黒牙さん」
決定を押す直前に天照が黒牙を呼ぶ。

黒牙は振り返ると天照の唇が額に当たった。

「あなたに祝福を・・・」

天照は唇を離してそう言うと、自分の世界に帰って行った。
黒牙は一瞬のことで少し戸惑うと同時にマウスに乗せていた指が決定をクリックした。

第二十二話『少年は異界の扉に手を叩く』（後書き）

次は閑話です

閑話『狐と神』（前書き）

閑話。

現在、ＰＶ３１４７１
ユニーク６２１３
お気に入り登録件数２３
週間アクセス数７７０

応援してくれている方へ。
色々問題がありすぎる作者ですが、頑張っていきますので、これからもよろしくお願いいたします。

お気に入りに登録されている方へ。
本当にありがとうございます。

閑話『狐と神』

「久しぶりですね。私（玉藻）。」

辺り一面白い世界の片隅で少女の声が聞こえてきた。

「こんな所なんのようですか、大元の私（天照）。」

白の世界に突如人影が現れた。

ピンクの髪をした青い服をまとった狐耳と尻尾の少女が。

「ずいぶんな態度ですね。それではあなたの想い人に嫌われますよ。」

天照は少し嬉しそうに答えると玉藻は目を大きくした。

「そ、そ、そ、それはいったいどう言うことですか！」

玉藻は天照に大声で言うと、天照は笑いながらその世界に現れた。

「くすくす。すみません、彼なら無事ですよ。何の後遺症も無いですから。」

「そうですか、良かった。」

天照の言葉にホッとした玉藻、彼女自身今だにあの時のことを後悔しているのだ。

自分を護るために死んだ少年のことを・・・

彼が死んだとき、玉藻は朧気ながら彼が言っていた世界に「彼と一

緒に生きたい。」と願った時、玉藻の力が発動したのだ。
自分を護るように術式が現れ、そして死んだ彼の魂を呼び戻し、彼の世界に送り返すために天照としての力も使った。

「それで黒牙さんは？」

玉藻が天照に訪ねると天照は、その微笑みが少し曇った。

「黒牙さんは、あなたを現世蘇らすために・・・
聖杯戦争にでるそうです。」

それを聞いた玉藻は、驚きの表情を隠せなかった。

「（今だに私を求めてくれるのですね・・・）」

「それと黒牙さんに「あれら」と私からの祝福を与えましたから。」

天照がそう言うと、また微笑みながら、消えていく。

「あ、そうそう。」

天照は何かを思い出したように言う。

「黒牙さんがあなたと現世で生きられ無くても、別世界でも良いから一緒に生きたいそうですよ。」

天照は笑顔で玉藻に言うと、その姿が消えてしまった。

残された玉藻は少しの間フリーズしていたが、やがて尻尾を抱いて嬉しそうに飛び跳ねまわった。

キャラ紹介2

現在編から聖杯戦争編にかけてのキャラ紹介です。

名前　斬龍黒牙
性別　男
外見　黒髪黒目。聖杯戦争参戦の服装は、蒼の服に黒いズボン、そして漆黒のロングコート着用。
その他　天照から祝福を受けた。
天照から「殺生刀」を貰い、体内に宿している。
描かなかったが、神社にて「殺生刀」を出す訓練及び戻す訓練をしてコントロールは出来る。
性格は良くも悪くも一途。（興味あること以外には無関心）
Ｆａｔｅ風に書くとこんな感じ。

斬龍黒牙
クラス：祝福されし者（ブレイサー）
武器：殺生刀　？？？？？？（情報が不明瞭です。）

筋力　Ｄ→Ｅ
耐久　Ｅ→Ｆ
魔力　Ｄ→Ｅ
敏捷　Ｂ→ＥＸ
幸運　Ｃ→ＥＸ

クラス別スキル

祝福　ＥＸ：霊的な何かから祝福を受けている。ここまできたら寵愛に近い。自身のステータスの幸運と一番ランクの高い（幸運を除く）ステータスをＥＸにし、それ以外のステータスをＥ以下にする。
（元からＥだった場合は一段階ダウンする。）
矢避けの加護　ＥＸ：遠距離からの全ての物理攻撃を動かずにすべて回避可能。
直感　ＥＸ：戦闘以外でも危険な場所などすぐさま分かる。

固有スキル
魂の共有　ＥＸ：玉藻とのみ魂でかなり深い繋がりがあるため、互いの危機を知ることや力を使うことができる。
見切りの才　Ｃ：相手の動きに反応して攻撃を避ける技能。このランクだと回避可能な技ならある程度（だいたい５０回）見たら全て回避可能。
天照の加護　ＥＸ：自分に対しての呪いを完全無効化。

宝具　？？？？？？（不明）

名前　玉藻の前
性別　女
外見　ピンクの髪に琥珀色の目で、服装はいつもの。
その他　黒牙の心に現れた玉藻と、白い世界にいた玉藻がいる。両方とも同じ存在で黒牙の心にいるのは、彼女の絶望の淵でずっと殺生石の中で泣いていた心で、白い世界にいたのは英霊の座にいる存在の玉藻である。
初恋の相手は別にいるらしい。
今は黒牙に夢中で今度こそわ！と思っている。
Ｆａｔｅ風に書くとこんな感じ。

玉藻の前
クラス：キャスター
武器：水天日光天照八野静石　呪符

筋力　E
耐久　E
魔力　EX
敏捷　D
幸運　B

クラス別スキル
陣地作成　C→B：作るのは陣地と言う名の愛の巣です。
呪術　EX
変化　A

宝具　水天日光天照八野静石

名前　天照大御神（アマテラスおおみかみ）
性別　女
外見　玉藻の姿の狐の部分が消失、服装は巫女服。
その他　玉藻の大本。
玉藻の感情や記憶の一部が還元しているため、黒牙を特別視するが別に好きでも無い。

名前　河端彩葉
性別　女
外見　黒眼黒髪でポニー。私服はなぜか着物と言う子。

その他　古風なしゃべり方が特徴。
黒牙と始めての試合で勝てずに終わったため、黒牙と戦い一方的にして倒すのが現在の目標らしい。
彩葉親衛隊は本人公認で、男性も女性も結構多い。
ちなみに初回の時のモテる発言の真相は彼女達が原因であったりする。

第二十三話『予選開始』

黒牙は暗い闇に包まれたと思った時には、すでに闇は無くなり変わりに体育館のような所にいた。

「・・・・・・」

黒牙は周りを見回すと、何人かの人がこちらを見ていた。

「（現在、２０人ぐらいかな？）」

黒牙はそう思ったと同時に別の場所からまた数人が現れた。
その数がだんだんネズミ算式に増えていくように現れ、そして体育館にかなりの人が集まったと思った瞬間アラーム音が鳴り響いた。

【只今をもって受け付けを終了した。
さて君達も気になる参加人数だが・・・
今現在千人はいる。】

スピーカーから男の声でそう告げる。
周りは少し騒いでいるが別に問題は無いようだ。

【ではこれより予選を開始する。】

スピーカーの声が叫ぶと同時にどこからか変な唸り声が聞こえた。

「（何かイヤな予感がする・・・）」

黒牙はそう思い一人体育館の舞台袖に続く扉を開けて隠れる。

【ルールは簡単だ。サーヴァントを奴らに殺される前に召喚すれば良いだけだ。
たとえ召喚したとしても、全員が召喚するか死ぬかしない限りは予選は続く。】

そう言うと、スピーカーから鈍いブチっと切れた。

「（さっきの声が多分スピーカーの言っていた奴らか。）」

黒牙はそう思い、隠していた「水天日光天照八野静石」を取り出した。

「玉藻・・・来てくれ。」

黒牙がそう願うと同時に鏡は光り、狐耳付けたピンクの髪に蒼い服を纏った少女ー玉藻の前ーが現れた。
「久しぶりですね、ご主人様・・・
いえ、黒牙さん。」

玉藻がそう言うと、ニッコリ笑って黒牙に抱きついた。

「おや？黒牙さん。魂の質が変わりましたか？」

玉藻が抱きつきながら尋ねると黒牙は頷いた。

「多分コイツかな？」

そう言うと、手から黒い剣ー殺生刀ーが出てきた。
玉藻はそれを見て驚き声を荒げようとするが、黒牙がとっさに口を

塞いだ。

「今は予選開始してるから。静かに。」

黒牙がそう言うと、玉藻もコクコクと頷いた。
それと同時に殺生刀が淡く光り玉藻の中に入っていく。
玉藻は少し目を閉じて、その光を受け入れる。

「へぇ。黒牙さんって以外に泣き虫さんですね。」

玉藻はにやけながら黒牙を見る。

「うるさい。」

黒牙は少しスネたようにそっぽを向いた。

「はいはい♪
玉藻もそんなにあなた様に思って貰って幸せ者です～♪」

そんなやりとりをしていた黒牙達とはうって変わり、体育館内から外に出て召喚しようと多くの人達が出入り口に殺到していた。

「ふむ。仕方ないかの。」

一人の少女が体育館に戻り用具が沢山入っている倉庫に入ると、すぐさま召喚の術式を発動させた。

「セイバーのサーヴァントよ来い！」

少女が叫ぶと同時に一人の男が現れた。その姿は着物を着て腰には

刀と脇差しを挿していた。

「セイバーのサーヴァント、お呼びにより推参。」

男は少しイヤそうな顔をしながら、少女をみる。

第二十三話『予選開始』（後書き）

さぁ、オリジナルセイバー参上。

彼の正体はいかに！

第二十四話『奴らとマスターとサーヴァント』

出入り口が静かになり、体育館に残っているのは3人・・・

一人は先にキャスターのサーヴァント、玉藻の前を召喚した黒牙。

もう一人はセイバーのサーヴァントを召喚した少女。

そして二人のいる場所とは違う場所にもう一人の少年が隠れていた。

「アーチャー。今ココに誰かいる？」

少年は傍らにいた赤い服を着た白髪の青年に尋ねた。

「あぁ。しかもサーヴァントまで全員よんでいるようだ。」

青年がそう応えたときだ。

パリンと窓が割れる音が多数鳴り響いた。

それと同時に少しグロテスクな怪物が体育館の窓を割って入って来た。

3人とサーヴァント達はとっさに気配を消し、先程現れた怪物をバラバラに見ていた。

―黒牙と玉藻サイド―

「玉藻・・・」

黒牙は小声で玉藻を呼ぶと玉藻も頷いた。

「なるほど。あれがさっきの放送で言っていた奴らか・・・」

「黒牙さん、他にも人が・・・」

「何人ぐらい？」

「おそらく二人。皆さんサーヴァントを召喚しています。」

「なるほど。」

玉藻の応えに黒牙は少しこれからのことを考えた。

―黒牙と玉藻サイドエンド―

―少女とセイバーサイド―

「マスター、奴らと戦いたいのか？」

セイバーが尋ねると少女は先ほどから握り締めている刀を持ってそわそわしていた姿勢をビシッと直すと「お主とも戦ってみたいのじゃが？」と言う。

「（強くなりたいと思うのは良いことだが・・・・・・）じ～～～」

「どうかしたのか？」

「いや、何でも無い（外れだな・・・・）」

セイバーは内心ため息をしていると、少女は倉庫の出入り口に近付いた。

「まさかとは思うが・・・」

「行くぞ、セイバー！出陣だ！」

そう言うと、少女は奴らに向かって突っ込んだ。

「（どこから突っ込めば・・・・・・）」

セイバーも頭を少し押さえたが、すぐさま、少女の後を追った。

―少女とセイバーサイドエンド―

―少年とアーチャーサイド―

「他のマスター達の動きはどう？アーチャー。」

少年がアーチャーに尋ねるが、それより少し早くどこからか、扉が開く音が聞こえた。

「ヤァァァ！」

女性の掛け声が響く。

少年は「女性のサーヴァント」かなと思ったが、どうも違うらしい。

「この世界では、どうやら召喚できれば、マスターにも何かしらのクラスとしての力と武器が付与されるらしいな。」

アーチャーがそう言うと、少年は納得したようだ。

「なら、その娘を助けないと、ね。」

少年はそう言うと、アーチャーに同意を促す。

「はぁ～。全くもって。
本当なら、相手を助けずに様子を見ろと言いたい所だが・・・
そんなことに霊呪を使われたら困るからな。」

アーチャーはそう言うと、二振りの剣を虚空に召喚して、両手に持った。
少年は少し首を傾げたが、すぐに先程の声の主を助けるために動いた。

―少年とアーチャーサイドエンド―

―黒牙と玉藻サイド―

「黒牙さん！あれを！」

玉藻が少し驚いて奥らの方に指を指した。
黒牙は何だろうと思いそちらを見ると、そこには自分が見知った少女、「川端彩葉」が奥らに向けて突っ込んで行く。

「・・・・・・」

黒牙は唖然としたがすぐさま元に戻る。

「玉藻、奴らを殺るぞ。」

玉藻に向けて黒牙が言うと、玉藻は頷き二人は同時に奴らに向かって走った。

―黒牙と玉藻サイドエンド―

第二十四話『奴らとマスターとサーヴァント』（後書き）

次回より、こちらに人物の詳しい情報を書きます。

第二十五話『奴ら≠学園黙示録のあれ　奴ら＝ＮＥＰＨＩＬＩＭ：Δ』

「ヤァァァ」

少女は叫びながら手近にいた奴らの一人に向かった。
奴らの姿はまるで首無しの青いボディビルダーのように異様な姿だった。
そんな奴に向かって少女は駆け抜けると同時に刀を抜刀する。
そして抜刀した刀を鞘に戻すと、奴が上半身と下半身に別れながら徐々に消えていくのが見えた。
少女はもう一体に駆け抜けようとしたとき、二体が少女に向かって襲いかかる。

「マスター！」

どこからともなく少女呼ぶ声が聞こえた。
そう思った時には二体は真っ二つに別れまた消えた。

「勝手に先々いくとあぶないぞ。」

セイバーはそう言うと、握っていた二振りの刀の血脂を払い、鞘に納める。

「すまん。」

少女はそう言うと、奴らから少し距離をとった。

「ところでセイバー。」

「なんだ、マスター。言っておくが、我はどこぞの騎士王みたいに遠距離技はもたんぞ。」

「騎士王？・・・。まぁ良いが。しんどいが互いにサポートをしつつ」

少女が言おうとしたとき、どこからともなく一本のねじれた矢が、奴らの一体を貫くと同時に爆発を起こし、奴らの何体かを倒した。

「大丈夫ですか！？」

少年がそう言いながら赤い青年と共に体育館の二階からでてきた。

「マスター！」

青年が叫ぶと同時に奴らの何体かが跳躍すると、二階の少年の近くに着地した。

「甘いよ」

少年がそう言うと、一本の槍を出現させて奴らに向かって連続して突きを放つと奴らが消えていく。

「すごい・・・」

少女は感嘆していると、また窓ガラスが割れて、奴らが入り込んできた。

「「切りがないな（ねぇな）・・・」」

サーヴァント達がそう呟いた時、突然奴らがいた所から巨大な火柱が上がった。

「間に合ってるな。」

その声と同時に少年・・・黒牙と少女・・・玉藻があらわれた。

「やはり貴様も参加していたか。黒牙よ！」

少女が凶暴な笑みを浮かべながら黒牙に向かって言った。

少女（川端彩葉）
クラス　ソードダンサー
性別　女

筋力　C→B（A→S）
耐久　C（A）
魔力　B（S）
敏捷　A→S（EX）
幸運　C→D

クラス別スキル

直感　C
剣舞　B　このスキルが高いと相手の攻撃に対して、無理なくかわせるようになる。
Bだと視覚しているものならすべてに有効。

個別スキル

抜刀術　A　敏捷と筋力を一時的に一段階ランクがあがる。ランクが高いと相手の必中する技になる。Aなら剣の殺傷範囲内で自分から攻撃する場合のみ有効。

戦意高揚　A　相手がかなり強いなら、自分の力も上げる能力。（）内が発動中の時の状態。

第二十六話『体育館内の激戦』（前書き）

すみません。
遅くなりました。

第二十六話『体育館内の激戦』

「すまない、助かったよ。」

少年は黒牙に向かって礼を言うと、近づいて来た奴を槍で貫いた。

「別に良い。こいつらがココにいてるため、俺らも戦わないといけなかったからな。
それに知り合いを目の前で殺されるのもイヤだしな。」

黒牙はそう言うと、玉藻の持つ呪符と同じ物を奴らが固まっているあたりに投げる。
すると奴らに呪符が当たった瞬間、風が集まり近くにいた奴らごと真空の刃で切り刻んだ。

「ふん。私があんな奴らに殺されるか！」

少女ー川端彩葉ーはそう叫ぶと刀で奴らを一刀両断にしていく。

「そう言いながら、さっきはかなりピンチだったろうが。」

彩葉のサーヴァント、セイバーが冷静にツッコミをいれると同時に彩葉の後ろから来る奴らを二刀を持って迎撃する。

「うるさい！」

彩葉が叫ぶと同時に彩葉とセイバーの死角から奴らが襲おうとした瞬間、奴らを遠くで見ていた少年のサーヴァント、アーチャーが射抜いた。

「君達。こんな所でケンカをするとは、よほど死にたいのか？」
アーチャーは皮肉を言いながら少年のサポートにも入る。
「御主人様（マスター）。」
黒牙のサーヴァント、キャスターの玉藻が黒牙を呼ぶと呪符を複数枚取り出すと、周りに向かって投げる。
それと同時に黒牙も呪符を取り出し敵に投げる。
「呪相・密天！」
黒牙が叫ぶと呪符に向かって風が集い始める。
その風に乗って、玉藻が投げた呪符も黒牙の呪符に引き寄せられる。
そして一瞬玉藻の呪符の一枚から火が出たかと思うと前から襲いにかかる奴ら全員を業火が包み込んだ。
「さすがはキャスターのサーヴァントと言った所か・・・」
遠目で見ながらセイバーは呟く。
それと同時にマスターのサポートをする。
「だいぶ数も減ってきたか。」
アーチャーは辺りを見ると、後ろから接近してきた奴らに気付くと同時に、二振りの陰陽剣をもってして切り裂いた。
それから奴らを倒し続けること約１５分。

ようやく最後の奴らを倒した。

第二十六話『体育館内の激戦』（後書き）

セイバーのサーヴァント
クラス　セイバー
性別　男

筋力　Ａ
耐久　Ｂ
魔力　Ｅ
敏捷　Ａ＋＋
幸運　Ｂ

スキル

対魔力　Ｄ
見切りの才　ＥＸ　初めて見る技でも余程のことが無い限り、ミリ単位での回避ですませることができる。

第二十七話『ひとときの同盟』

―???サイド―

一人の人がパソコンの画面に向かい何かを操作している。

「へぇ～。僕のプログラムした奴らをいとも簡単にねぇ。」

人はそう感嘆しながら、パソコンを操作している。

「いるのだろう？」

人が後ろに声をかけると、先程まで誰もいなかった所から一人の青年が現れた。

「もしかしたらこいつらが、俺の世界を潰すかも知れねぇ。」

人は青年に言うが、青年は何も応えない。

人もそれが当たり前のように青年に話しかけている。

―???サイドエンド―

体育館内では3人の少年少女とそれに付き従うサーヴァント達が話合いをしていた。

「まず自己紹介といきましょう。私は如月暦（きさらぎこよみ）と言います。サーヴァントはそこのガングロです。」

少年ー暦ーの言葉にアーチャーは少し怒るが、本戦で戦うかも知れない敵に、わざわざ自身のサーヴァントのクラスを教える義理は無いからである。

「私の名は彩葉だ。川端彩葉。サーヴァントはそこのセイバーだ。」

彩葉がそう言うとセイバーは溜め息を吐いた。

「（マスター。クラスバラしちゃダメだろ。）」

セイバーはそう思いながら、先程よりさらに深い溜め息をついた。

「俺は斬龍黒牙。恋人（サーヴァント）は見ての通りだよ。」

黒牙は玉藻の頭を撫でながら言う。

「「「「（リア充なのか？）」」」」

4人は2人の醸し出す雰囲気に若干苛立ちを覚えながら話合いを続けた。

「まず放送で言っていた「奴ら」と言うのは十中八九先程の頭の無い筋肉の化け物だと思う。」

「それに・・・先の戦闘でもわかる通り奴らは団体で現れて戦うらしく、一組だけで戦うのは難しいだろう。」

暦の言葉にアーチャーが続けて言った。

「つまり、我らと同盟を結びたいと？」

セイバーの疑問に暦は頷いた。

「今居る3人なら、余裕で予選突破出来るかも知れないから、どうかな？」

暦の言葉に彩葉と黒牙は了承する。

ところ変わって学校の屋上には、先程の奴らと一人の少年と金の鎧を身に付けている青年がいた。

「あ、あ、あ、アーチャー、なんとか」

少年は恐怖のためか震えていた。

「ふむ、雑種風情が我を呼び出すなぞ・・・」

アーチャーと言われた青年は少し苛立ちを覚えた。

「まぁ、今回は許してやろう。」

そう言うと、接近してきていた奴らが何かの武器に貫かれていた。

それと共にアーチャーの後ろにはかなりの数の武器が浮かんでいた。

そして・・・

「ゲートオブバビロン！」

そう叫ぶと同時に浮かんでいた大量の武器が降り注いだ。

第二十七話『ひとときの同盟』（後書き）

如月暦

クラス　ランサー

男

筋力　B
耐久　D
魔力　C
敏捷　A
幸運　B

第二十八話『予選の現状』（前書き）

感想が欲しいですね・・・

批判以外の・・・

第二十八話『予選の現状』

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ」

校内から断末魔が多数聞こえてきた。

「奴ら」に見つかり殺された者達だ。

例えサーヴァントがいても、その圧倒的な数にものをいわして襲い掛かるから、しかもたちの悪いことに一体一体が英霊に近い力を持つ。

奴らとやり合って生き残るには例えサーヴァントを召喚していても、そのまま死に繋がることも多々ある。

今現在も絶えず断末魔が聞こえる。

生き残るには早い段階からサーヴァントを召喚して有利な戦闘場所を確保するか、誰かと同盟を結ぶしかないような状態なのだ。

二年三組の教室内

「早く召喚してくれ！」

一人の少年が叫んだ。

「わかってる！」

少年の後ろには一人の女性が今まさにサーヴァントを召喚しようとしていた。

「みんなもうちょっとだから頑張って下さい！」

少女が叫ぶと少年少女達がドアや窓から襲いに来る奴らの動きを封じ込めていた。

だが・・・

「ヤバい！」

一人が気付いたのだ、隣の教室内になだれ込む奴らの足音がそして・・・

何かが爆発するような音と共に奴らは壁を壊してなだれ込んできた・・・

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ」

さらに多数の断末魔が聞こえてきた。

奴らの知能（ＡＩ）も高いらしく、長期戦にはもつれ込んだら最期、奇襲などで参加者達を次々に殺していく。

まだまだ続くこの断末魔や悲鳴は鳴り止むことを知らないかのように今もきこえてくる。

体育館内

「助けに行かないのか？」

彩葉がその場にいる二人の少年に尋ねた。
「彩葉さん。いくらなんでも無茶ですよ。
奴らとの戦いはできるだけ避けた方が良いのですから。」
暦はそう言うと同時にアーチャーが現れた。
「上から見たのだが、あれは酷い光景だ。
先程まで善戦していた１０人規模のチームの意表を突いて全員抹殺していた。」
アーチャーは辛そうにそう言った。
自分ならもしかしたら助けられたのかも知れない、と言う後悔がその声音に出ていた。
「少し呪術を強化してくる。」
黒牙がそう言うと、玉藻を連れて結界の呪符を貼った所に向かう。
今この場所は二人が創った結界により一応安全地帯になっているが、それでも完全な安全地帯では無いため、結界の中枢に二人は足を運ぶ。
「人除けの結界の魔力がつきかけているな・・・
玉藻。」
黒牙がそう言うと、玉藻が黒牙のもとに来る。
そして呪符に魔力を込める。

「これで完了です。
あっ、黒牙さん！
そちらの対魔術結界の呪符と対物理結界の呪符の消耗が激しいので、
追加で五枚ずつ書いて貼って下さい。」

玉藻の言葉に黒牙が頷きすぐさま呪符を作ると同時に呪符でできた
柱の２つにそれぞれ貼った。

閑話『一時（ひととき）の休息』

予選開始からまだ数時間しか経っていないのに、早くも大多数の参加者（プレイヤー）が死亡（リタイア）になり、今では悲鳴もほとんど聞こえない。
しかし放送が無いためまだ予選の段階なのだ。
生き残った誰しもが早く予選の終了を願うが、まだまだ長くなりそうだった。
そんな時、急に放送が鳴り響いた。

「これより、予選を一時中断し、朝食の休憩とする。生き残った諸君は食堂、もしくは購買部で朝食をするように。
なお、予選再開の時間は未明とする。」

それを聞いた者達は今まで隠れていた場所や戦っていた場所から出てきて、ほとんどの者達は食堂へと向かう。

「黒牙さん。食堂にはいかないのですか？」

玉藻が黒牙に尋ねると黒牙は少しイヤそうな顔をした。

「なんか変に嫌な感じがするからな・・・」

そう言うと二人は購買部へと足を運ぶ。

一方、食堂では。

「なんで、残りは激辛麻婆セットしかないんだよ！！！」

と言う悲痛な叫びが聞こえた。

閑話『一時（ひととき）の休息』（後書き）

感謝感謝

ＰＶ五万突破です。

第二十九話『予想外の出来事』（前書き）

ようやく完成・・・

暑さでノックアウトしているため、意識朦朧です・・・

早く秋よ来い！

緑茶（アーチャー）「おいおい、作者。まったく。

うん？すまんな、作者の戯れ言だと思って、聞き飛ばしてくれ。

てな訳で本編開始な。」

第二十九話『予想外の出来事』

予選はもう終盤になっている。そのためさきほどから悲鳴が聞こえなくなった。
しかし、奴らは未だに索敵を続けている。
放送も最初と食事休憩の時だけしか流れていない。（再開の放送が流れなかったため、食堂にいた何名かは奴らの餌食になったらしい）
そのため、あと何名が生き残っていて、何名がサーヴァントを召喚していないか分からなかった。
しかしそん中、一人屋上にいた少年が叫んだ。

「アーチャー！学校にいる奴らごとなんとかして！！！」

その叫びと共に屋上におびただしい数の刀剣類が現れた！
そして・・・・・・
一瞬にしてすべての刀剣類は学校に降り注いだ。

「あれは！」

アーチャーが屋上を見て驚く。
それは昔、同じ光景を見たことがあるからこそ、奴が参戦しているのがわかった。

「アーチャー、何か知っているの？」

暦がアーチャーに尋ねると同時に展開していた刀剣類がこちらの体

育館の方に襲ってきた。

「キャスター！」

黒牙が叫ぶと同時に玉藻にかなりの呪符を投げる。
それらを玉藻は少し触れては降り注ぐ刀剣類目掛けて凪いだ。
すると、それに触れた刀剣類は何かにはじかれたかのように、どこかに飛んでいった。
しかし、いくら呪符を大量に投げても所詮はただの紙なのだ。
故に・・・

「なっ！」

黒牙が驚くと自分の足下に禍々しい赤い槍が刺さっていた。

「黒牙様！」

キャスターが一瞬、黒牙の方を見ると同時に刀剣類の弾幕がさらに激しくなった。

「仕方がない！」

アーチャーがキャスターの前に走ると、目の前にピンク色の花の花弁が広がった。

「すまない、アーチャー。」

「なに、かまわないさ。君には先程主人を助けて貰ったしな」

アーチャーはそう言うと、花弁に力（魔力）を込めて敵の攻撃を防

御する。

「そう言えばセイバーさんと彩葉さんは？！」

暦が周りを見ると、少し離れた位置に彩葉達が襲い来る刀剣類の雨を踊るようにかわしていた。

時には剣ではじくがそのほとんどは、数ミリ単位でかわしていく。

「マスター。無理せず、彼らの所に。」

セイバーが彩葉に言うと、彩葉はそれを無視して飛んでくる刀剣類をかわし、さばいていた。

「黒牙さん！キャスターさん！」

暦が叫ぶと同時に彩葉の方に指を指すと、黒牙達は呪符を投げながら彩葉達に近づき、暦達もその後に続く。

その瞬間。

いきなりすべての攻撃が止まった。

『ただいま全員がサーヴァントを召喚しているのを確認した。

これにて、予選を終了する。

予選通過人数は３２人だ。

これより休憩をとった後、本戦の場所に転移する。

また、先程の刀剣の雨を起こした者は予選規約違反として本戦にてペナルティーを与える。

以上。』

放送が終わると、空に浮かんでいた刀剣はすべて、まるで何もなかったように消えていった。

ＥＸＴＡＲ『第二十九話『予想外の出来事』　アーチャー（金ピカ）とマスター

ごめん遅れたよ。

では、おまけ編スタート！

EXTAR『第二十九話『予想外の出来事』　アーチャー（金ピカ）とマスター

僕の名前は「日高満（ひたかみつる）」。
この聖杯戦争に、どうしても叶えたい願いがあるから参加しました。
参加したのですが・・・

「何を見ている！」

「ひっ！ごめんなさい。」

「まだ何もしていないであろうが。」

「ごめんなさい。」

「ええい！いい加減、謝り続けるな！」

先程からずっとこんな調子なので、正直イヤです・・・
せっかくの料理もあまり美味しくないです・・・

「辛っっ！」

あっ。また激辛麻婆セットの犠牲者の方の声ですね。
あのセットは、辛いもの好きにも堪えるらしい辛さらしいですから。
（正確には辛さしか無く味が無いらしいですが・・・）

話が脱線しましたね。
まぁ、そんなこんなで僕とサーヴァントの関係は最悪。
しかも礼呪を一つ使ってしまいました・・・
「僕を助けて」と礼呪に願ったので、一応このサーヴァントは僕を

助けてくれるみたいだし・・・

「いい加減にしろ！この雑種が！」

ただ目つきとか態度は完全に不良のあれに見えるから怖い。

だからついつい謝ってしまう。

「ごめんなさい。」

そして繰り返す・・・

もう少しこのアーチャーのサーヴァントと仲良くできれば・・・

「ギャァァァァ」

誰かの叫び声が聞こえた。

僕は反射的に叫び声が聞こえた方に向いたと同時に、アーチャーが僕の襟首をつかみ、その場から離れた。

離れると同時に立っていた所に拳が通過し床が陥没した。

「何をしている！死にたいのか！？」

アーチャーがそう言うと同時に何も無い空間からいくつもの武器が現れ、敵を貫く。

「な、なんで・・・」

「ふん。この聖杯戦争（ゲーム）の支配者（マスター）が言っていたであろう！

再開は未定と。それは恐らく今の状況が起きるからこそ、未定と応えたのであろう」

僕の疑問はアーチャーはしごく完結に応えてくれた。
僕は急いで屋上に向かう。
奴らは強いけど出入り口が一つしか無い屋上でなら、アーチャーに負担をそんなにかけないと思ったから。

「アーチャー！屋上に行こう！」

「ふん。良いだろう。」

アーチャーはいつも通りの態度に僕は安心しながら、屋上に向かう。
しかし、そこには待ち伏せていたかのように、大量の奴らがいた。

「アーチャー・・・」

「やはりな・・・おおかた我らがずっといたため、ここに大量に現れると思っていたが・・・」

アーチャーは少し呆れて周りを見てため息をもらした。

「こうまで予想通りだと面白みがかける。」

アーチャーがそんなことを言いながら、前から襲い来る奴らを蹴散らしていく。
それと同時に僕の後ろから大量の足音が聞こえてきた。
それはまだサーヴァントを召喚していない参加者（プレイヤー）と大量の奴らだった。

「アーチャー！学校にいる奴らごとなんとかして！！！」

僕はその参加者（プレイヤー）を指差しながら叫んだ。

第三十話『予選終了』（前書き）

シンドイ・・・

緑茶「ところで作者。」

なに・・・

緑茶「お前に渡したい“もの”があるんだ。」

へぇーなんだろう。

緑茶「良いからこいよ。」

第三十話『予選終了』

予選が終わると放送により、一度体育館に集合することになった。
全員集まると一人の青年が現れた。

「諸君、予選通過おめでとう。
これにより諸君は夢を現実にするために大きく前進したのだ。
明日からは本戦となるため今日はゆっくり休むと良い。」

青年がそう言うと全員が学校内に行こうとした。

「さて、解散前に君達にプレゼントをやろう。」

青年がそう言うと、全員に何かを投げる動作をする。
それと同時に、左手に腕時計のような物が全員に巻かれていた。

「それはこの世界で作った、情報端末機だ。諸君はこれを無くさないように。以上。」

青年がそう言うと来た時と同じ様に消えていった。

「ねぇ、黒牙様。それはちゃんと作動していますか？」

玉藻は先ほどの腕時計を指差して聞いてきた。

「時計としての機能は作動しているみたいだけど・・・」

黒牙は腕時計をいじっているといきなりたくさんの表示が時計から浮かび上がってきた。
その中には、予選で一緒に行動していた二人の情報もあった。
「相手のもう少し詳しい情報があれば、良いとおもうのですが・・・」
そう言いながら、玉藻は黒牙と一緒に画面を見るが、ほとんどの参加者は名前だけしかわからない。（彩葉だけはかなり詳しい所まで書かれていた。）その中に一人の少年の情報は全部公開されていた。

【日高　満

クラス　帝（エンペラー）

能力

筋力　D
耐久　C
魔力　B
敏捷　E
幸運　B

クラス別スキル

皇帝特権　EX
本来持ち得ないスキルを、本人が主張することで短時間だけ獲得できる。

皇帝の徴収　ＥＸ
相手が持つスキルを一つだけ、ランクを一段階落として習得できる。
なお、スキルはすべてが対象である。

武器　無し

備考　スキル　王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）習得

クラス　アーチャー

真名　ギルガメッシュ

能力

筋力　Ｂ
耐久　Ｃ
魔力　Ｂ
敏捷　Ｃ
幸運　Ａ

クラス別スキル

対魔力　Ｅ
魔術に対する守り。
無効化は出来ないが、ダメージは軽減する。

単独行動　Ａ＋
マスター不在でも行動できる能力

固有スキル

黄金律　A
人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。

カリスマ　A＋
大軍団を指揮・統率する技能。

神性　A＋→B
神霊適性を持つかどうか。
高いほどより物質的な神霊との混血とされるが、本人が神を嫌ってるためランクダウンしている。

宝具

天地乖離す開闢の星　（エヌマ・エリッシュ）

王の財宝　（ゲート・オブ・バビロン）】

これらの情報と相手の人相に服装、さらに相手の武器の詳しい解説とその使い方など、多々事細かに書かれてある。

「どうやら、この方達が例の違反者達みたいですね。」

「みたいだな。」

二人は少し呆れながら、相手の情報を見ていた。

「あっ、黒牙様。この方達、どうやら令呪が。」

「らしいね。唯一の攻め手になるのはここだけか・・・」

「いえ、この『マスターを守れ』と令呪を使っているので・・・
それにこのサーヴァント。かなりチート性能ですし・・・」

「確かに。
その上にマスターもかなりチート性能だしね。」

二人は相手の情報を見ながら、溜め息を吐いた。

第三十話『予選終了』（後書き）

緑茶「作者。覚悟はできてるだろうな？」

話が全然見えないんだが・・・

緑茶「トボケンナ！
お前がサボりまくってるから、今月のＰＶがかなり少ないだろうが！」

？？？？「って言うか。貴様が実は脳内で完成させながら、いつまで経っても書かず、ようやく昨日書き始めたよな！」

ランサー・・・なぜここに・・・

ランサー「決まってんだろ！仕置きだよ！貴様の！」

ヤバいかな…

ランサー「ゲイ、ボルグ！」

なんちゃって。ヒョイッとね。

スカ

ランサー「な、何！」

絶対必中でも幸運最大値＋敏捷最大値なら回避はできるよ。

緑茶「甘いな！」

後ろから攻撃しても、加護があるから遠距離攻撃はまず当たらないよ。

緑茶「何！マジで当たらねぇ！」

まぁ、変わりに能力が全体的にダウンするんだけど・・・

二人「・・・・・・」

ＥＸＴＡＲ『悪夢ー黒牙の隠されしものー』

ー？？？サイドー

辺り一面が真っ赤になっていた。
俺が使っていた机も、仲が良かったあいつのカバンもすべて真っ赤に染まっていた。

ここは学校の教室。
もう生きていないであろう人達の残骸があちらこちらに見えた。
そして黒板も真っ赤になっていた。
しかし、よく見るとなにか文字が書かれていた。

「黒・・・金・・・刃・・・」

漢字でそう書いているのがなんとなくわかったが、何を意味しているのかまではわからなかった。

しかし、その漢字の並びを俺はどこかで・・・
そう思い思い出そうとした時。

「ぐぁぁぁぁぁ」

不意に頭が痛くなった。
俺自身訳がわからなかった。

『今は無理しないで・・・』

その声が聞こえた瞬間、俺の頭痛が急激に収まっていった。

『君は今の君が過去に捕らわれる必要なんかないんだから・・・だから。幸せになって。』

その声がそう言うと、俺はだんだんとその姿が淡い光の如く消えていった。

しかし、消える直前で、俺はその声の主の姿を視界に捉えた。

その姿は玉藻・・・いや天照に瓜二つだった（しかし細部まで見れば少しくらい違いがある。）。

その彼女は泣きそうになるのをこらえていた。

そんな姿を俺は消える直前で見た。

『刃（じん）君。』

そんな声が聞こえた気がした。

―???サイドエンド―

「黒牙様・・・」

玉藻は黒牙の眠る傍らで、心配そうに見ていた。

それもそのはず、彼は眠っている最中に急に苦しみだしたのだから。

今は落ち着いたが、また苦しみだすのではと、心配をしていたのだ。

「うぅ・・・」

「黒牙様！大丈夫ですか！？酷くうなされていたようですが・・・」

「うん。大丈夫・・・」

黒牙がまだ眠そうにそう言ったが、玉藻自身彼が酷い悪夢を見たことぐらいわかった。
魂がかなり強固な繋がりがあるため、詳しくはわからないがそれくらいは余裕でわかる。

（黒牙様・・・やはり覚醒が始まったのでしょうか・・・）

玉藻は不安そうに黒牙の顔を見た。

ＥＸＴＡＲ『悪夢ー黒牙の隠されしものー』（後書き）

玉藻が語る、黒牙の覚醒の意味は！？

まぁ、まだまだ先の話ですが。

第三十一話『聖杯戦争ー本戦開始ー』（前書き）

見たときお気に入りが５０行ってたのにな・・・

緑茶「まぁまぁ。てか急展開すぎねぇか？」

蒼槍「てか、オレ様達の出番まだかよ！」

まぁまぁ。

？？？？「まだ貴様達の方がましでござるよ」

蒼槍・緑茶「だれだ！」

第三十一話『聖杯戦争ー本戦開始ー』

早朝より生き残った参加者全員は体育館に集まった。

「諸君、おはよう。いよいよ最後と言える決戦だが、少し舞台を変えよう」

青年がそう言うと指を鳴らす。
すると一瞬にして体育館・・・
いや学校自体が消え去り、密林へと姿を変えた。

「諸君はこの世界で最後の戦いを行いたまえ。また地図もその時計の機能に入れておいた。ではこれより全員を強制的に転送する。」

「それはどういうk」
青年の言葉に誰かが反論しようとした時には、全員が一瞬して消えていた。

「さて、諸君はどう戦うのか・・・」
青年はにやりと笑いながら、呟いた。

ー黒牙と玉藻サイドー

「玉藻無事か？」

「えぇ。それにしてもここは・・・」

黒牙の問いに玉藻は答えながら周りの様子を見た。
そこにはさっきまでとほとんど変わらない風景が広がっていた。
しかし他の参加者の姿が見えないことから、確かに転移したことがわかった。

「！！！？
玉藻！速くここから離れるよ！」

いきなり黒牙がそう言うと同時に、玉藻を抱いて全力で駆け出した。

それから十数分後のその場所に、岩のような体躯の男と幼い少年が現れた。

「こっちと思ったんだけど・・・」

「……」

「まぁ良いか。バーサーカー行くよ。」

そう言うと岩のような男はゆっくりと少年の後ろに続くように歩き始めた。

ー黒牙と玉藻サイドエンドー

ー彩葉とセイバーサイドー

川辺では二人のサーヴァントと二人の参加者が激突していた。

「遅いな。」

彩葉は余裕で相手の攻撃を避けると同時に刀で一閃する。

「ちっ！」

相手の青年は盾で受けると同時に剣で突こうするが、また避ける。
勝負はジリジリと彩葉が押しているのと同時にサーヴァント同士の戦いも彩葉のサーヴァント、セイバーが相手のアサシンを押していた。

「歴史では我と貴様は戦い、そして我が勝っていたな。」

「確かに戦いでは私が負けることになっているが・・・
果たして歴史通りになると思うか？」

「違いない」

セイバーのその攻撃をアサシンは長刀で受け流し反撃するが、小太刀に防がれさらに先ほど受け流した刀が攻撃してくる。
二人は笑いながら剣を振るうがやはりセイバーの二刀の方が有利。

「名残惜しいがそろそろ決着といこうか」

セイバーがそう言うと、両手をダラリと下にした。
アサシンも応えるかのように構えを変えた。
そして音が消えまるで空気が固体となったかのように重くなった・・・

「秘剣！燕返し！！！」

最初にアサシンが攻撃したセイバーは相手の攻撃を小太刀で受けようとした・・・
いや受けようとした瞬間に若干後ろに下がった。常人では確実にわからないぐらいに。
アサシンも技を出し相手の防御のしようとしたためか気付けなかったそして・・・
三つ同時の斬撃が当たるはずだった男は薄皮すら傷つかずに避けきり、同時に刀で斬りつける。

「後の先・・・」

アサシンはその光景に驚愕すると同時に相手の攻撃を受ける。
しかし受けるのがわかると同時にセイバーは小太刀で斬りつける。
勝負は一瞬にして着くと同時に、彩葉対青年の戦いもついていた。
青年の攻撃を交わしながら刀で顔面を貫いていた。

―彩葉とセイバーサイドエンド―

第三十一話『聖杯戦争ー本戦開始ー』（後書き）

アサシン「アサシンのサーヴァント、小次郎・・・」

蒼槍・緑茶「・・・・・・」

アサシン「貴様達にわかるか？出落ちキャラ達の悲しみが。まだ本編でも出落ちなら分かるが、私のようなキャラが出落ちだぞ！」

蒼槍・緑茶「・・・・・・」

緑茶「おいアイツもサブキャラだろう？（ひそひそ）」

蒼槍「てか活躍ぐらいさせてやれよ（ひそひそ）」

ムリムリ、相手は小次郎と戦って勝って有名な人だから（ひそひそ）

蒼槍・緑茶「なるほど・・・（ひそひそ）」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6699s/

狐と少年の物語

2011年10月13日10時14分発行